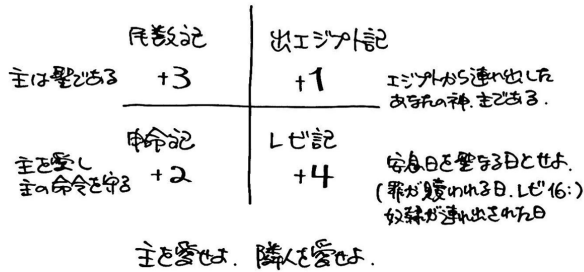




# モーセの律法 出エジプト記～申命記

モーセの律法と十戒  
(出エ→申) (11~14)  
主は大祭司である。主は王である。

2014.8.20

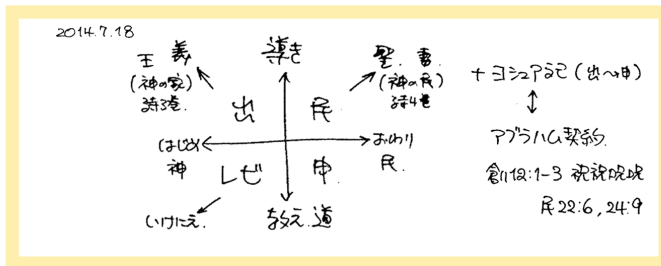


祝福

↓

アダム・生めよ、増えよ  
・地を支配せよ  
アブラハム・大いなる国民  
・大いなる名。  
↓  
祝福。

ノア・生めよ、増えよ。  
バベル・大いなる名。



モーセの律法と十戒の関係を見てみました。創世記と出エジプト記から民数記、ヨシヤ記というところ全体がモーセの教えですけど、モーセの時代の旧約聖書にあたるものが創世記ですね。その創世記の中でアブラハムに約束が与えられて大いなる国民、大いなる名を与えます、そして約束の地に入っていくのですということが言われました。そのアブラハムの契約がいよいよ成就するという、ヨシヤ記の時に成就するわけですけど、その前の段階、出エジプト記から申命記のところでは今度はアブラハムに約束された国が作られて約束の地に入っていくというところなんです。

この4つの書物、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記というこの4つの書物は、時間の順番であることはそうなのですが、特徴があります。

出エジプト記は、歴史的なストーリーが書かれています。レビ記は、それでシナイ山まで来て、シナイ山で律法が与えられているというその律法の教えが書かれています。民数記は、また歴史的な導きが書かれていて、申命記は、最後にまた律法という形で「導きの書物」と「教えの書物」というふうに分けられると思います。

出エジプト記は、(順番が逆で申し訳ないです) 神様が民を連れ出して、王の家を作りましたということなんです。そして、今度レビ記で、主は聖い方ですということを表すいけにえの律法が書かれています。民数記では、よく軍を数えているというところで、数える民数記と言われてはいますが、誓いがすごく多いです。聖なる神様だということを表す40年の訓練だった、それで、これから民が約束の地に入るときに祝福のことはを守りなさいというこの順番です。

十戒の律法と十戒

2014.8.20

(出エ→申) (1~4)  
主は大祭司である。主は王である。

民数記 主は聖である +3	出エジプト記 +1 エジプトから連れ出した 奴隷の神。主である。
申命記 主を愛し 主の命令を守り +2	レビ記 +4 安息日を聖なる日とせよ。 (罪が贖われる日。レビ16:) 奴隷が連れ出された日

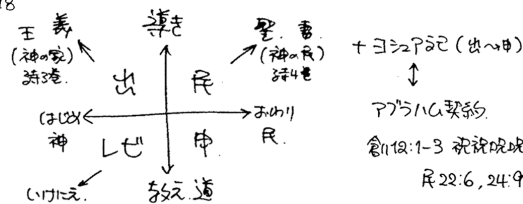
主を愛せよ。隣人を愛せよ。

祝福

↓  
アラム・生めよ、増えよ  
・地を支配せよ  
アブラハム・大いなる国民  
・大いなる名。  
↓  
祝福。

ノア・生めよ、増えよ。  
バベル・大いなる名。

2014.7.18

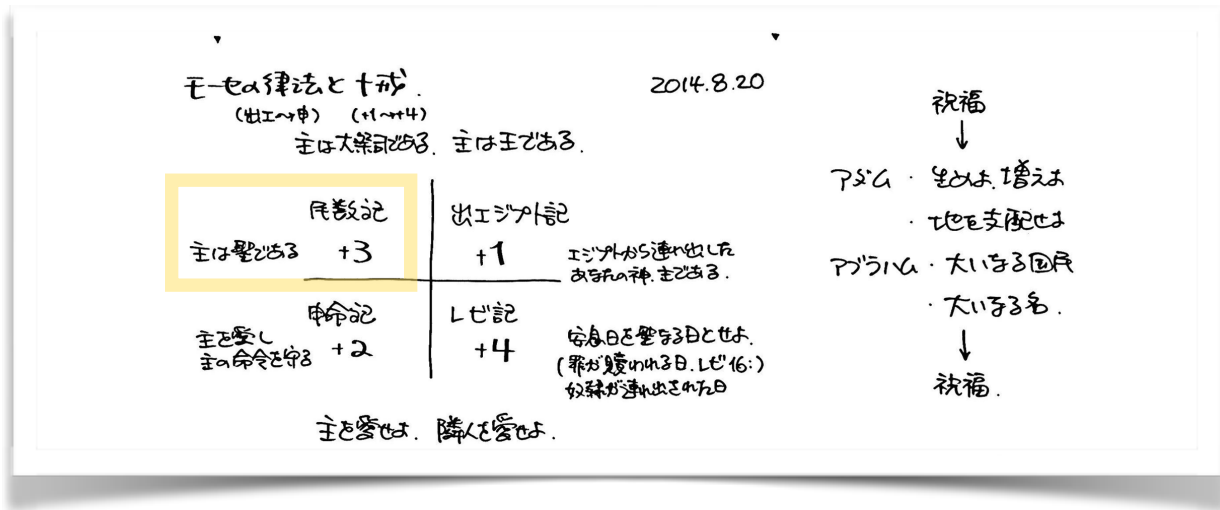


それが、この十戒の1番目から4番目の命令と並行しているであろうということが今回のポイントです。

1番目から4番目というのは、1番目は、「エジプトの国、奴隷の家から連れ出した神である、私のほかに神はいない」、パロと、神々と戦って勝ちましたというのが出エジプト記です。次にレビ記です。

レビ記は、いけにえの律法が書いてありますけれども、特に「安息日を聖なる日とせよ」という4番目の命令があります。6日間働いてすべての仕事をして7日目は主の安息である。奴隷が連れ出されて(あなたがたは奴隷だったということですね)自由になりました。そのことを覚えて罪が贖われる日であるということを表すレビ記という意味で4番目の律法です。

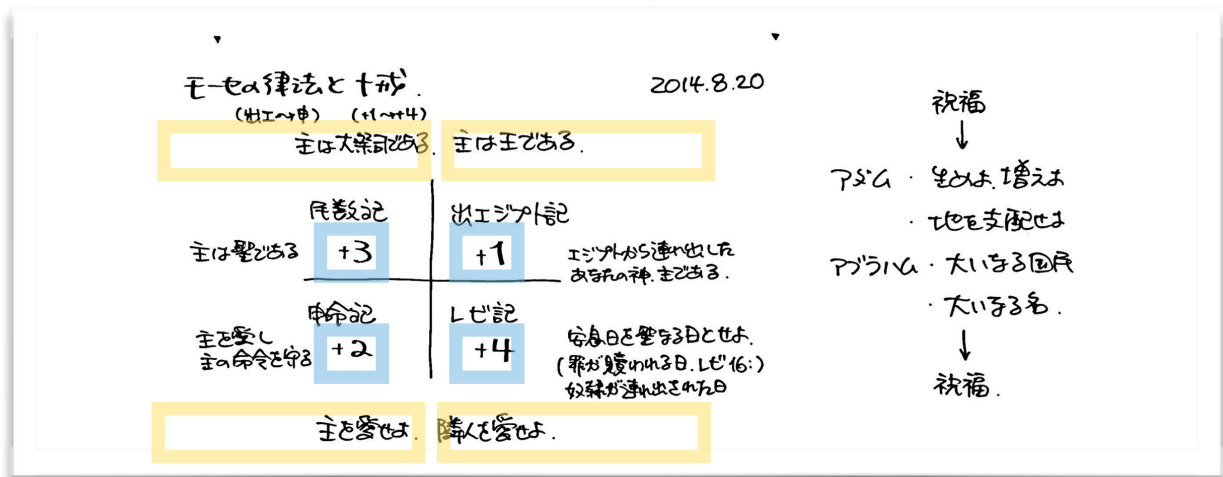
申命記は、2番目です。偶像を拝んではならないのところかと思う方もいますけれど…。確かにそうなのですが、忘れてはいけないのは、(申命記5章)10節の「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」申命記は、主を愛し主の命令を守りなさいという教えですので、この世のこれから入っていく地の偶像礼拝に惑わされないで主を愛し、主の命令を守りなさいと言われているので、この2番目の命令です。



残りの3番目、「主の御名をみだりに唱えてはならない、主は御名をみだりに唱える者を罰せずにはおかない。」これが民数記で教えられている主たるメッセージであるということは不思議な感じがするかなと思います。

エジプトから連れ出された民が文句を言って約束の地に入れなくなって、40年間荒野でさまよう。そして40年経ったのに、またこれから入る民も同じように文句を言って神様に逆らう、モーセに逆らうというようなことが書いてあるのに、なぜこれが主は聖であるという話なのだということなのですけど、この中で強調されている特徴としては、女性が出てくる。女性が誓う話がとて多くて、誓いを果たす、誓いを果たさないという律法がたくさんあるのですが、この誓いを果たすように言われている反対側の神様側のほう、神様は誓いを果たす神様であるということが、誓いを果たさないイスラエルであっても、アブラハムの契約を覚えてその誓いを必ず果たしてくださいとところが民数記の聖別される、神様はそのイスラエルでさえも聖別してご自分が命である、聖であるということをお示ししたというのが、民数記です。

その象徴的なところがメリバの水を出すところです。モーセがエジプト（からカナン）の地）に入ることが出来なくなってしまった20章の事件ですけども、そこでモーセは言われます。「わたしが聖であることをあらわさなかった」それがモーセが入れなかった理由になります。神様は、「この民は救えない、こんな民を救うことはできない、私には無理です」と言って諦めてしまったモーセに対して、「いやそんなことはない、私は聖である、命を与えるといった誓いを必ず果たします」ということが民数記の中心的なテーマである。



ということで、1、2、3、4という十戒の1番目から4番目の命令、律法の出エジプト記から申命記までを考えてみれば全体を把握することができるように、もともとそのように十戒が書いてあるのかなというふうに思います。

レビ記は「隣人を愛しなさい」、申命記は「主を愛しなさい」という教えです。出エジプト記は「主は王である」。民数記は「主は大祭司である」というのが、この主たるテーマをあらわしていることばになるかと思います。